

ファンク・ビート

ファンク・ビートの特徴

ファンク・ビートとは、その名の通り「ファンク」というジャンルで使われるビートです。ファンクにおける最も代表的なミュージシャンといえば、「ジェームス・ブラウン」で「SEX MASHINE」という楽曲が有名です。

ファンク・ビートの特徴は以下のとおりです。

- ウラ拍にアクセントを感じる「裏ノリ」
- レイドバック気味の演奏
- シェイクビートを用いたディープなグルーヴ
- タイトで歯切れの良い音色

ウラ拍にアクセントを感じる「裏ノリ」

ファンクはもちろん、
黒人発祥の音楽は原則として全て「裏ノリ」となります。

ウラ拍にアクセントを感じながら演奏するスタイルで、
ディスコをはじめとしたダンスミュージックにも多く用いられます。

レイドバック気味の演奏

ロックとは対照的に、
ファンクのリズムはレイドバック気味に演奏されることが多いです。

落ち着いたクールなグルーヴを演出する上で
大事なテクニックですので、しっかり意識していきましょう。

シェイクビートを用いたディープなグルーヴ

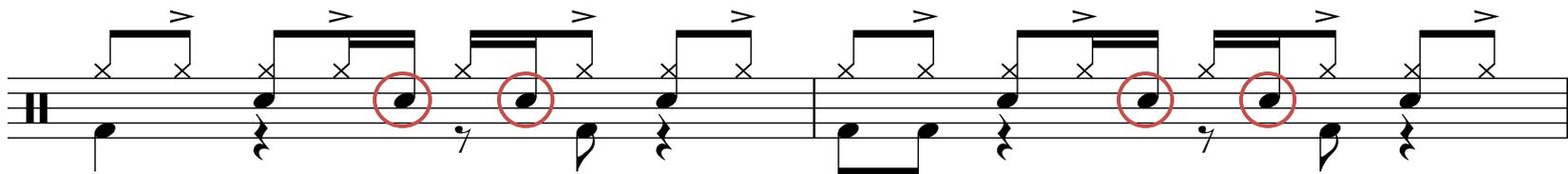
通常の8ビートや16ビート同様に、ファンクにおいても2拍目 & 4拍目でスネアを演奏するのが基本スタイル。

それに加えて、細かい16分音符単位のスネアを随所にちりばめたビートを「シェイクビート」といいます。

ファンクはもちろん、R&Bやヒップ・ホップでも多用される独特のビートです。

シェイクビート

■ シェイクビート



2拍目 & 4拍目のスネアのほか、
16分音符単位の細かいスネアをちりばめたパターン。

ファンク、R&B、ヒップ・ホップなどで多用される。

ファンク・ビート

パターン①

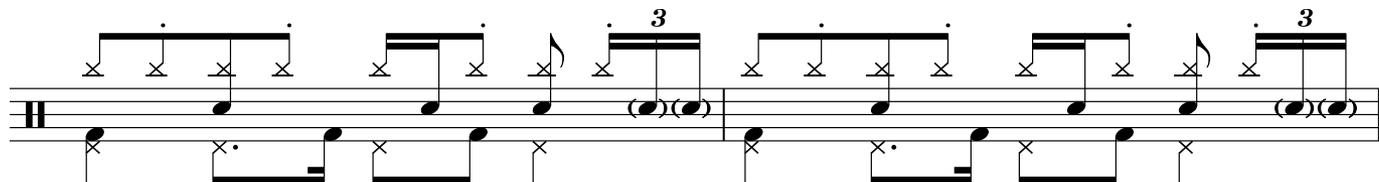
パターン②

パターン③

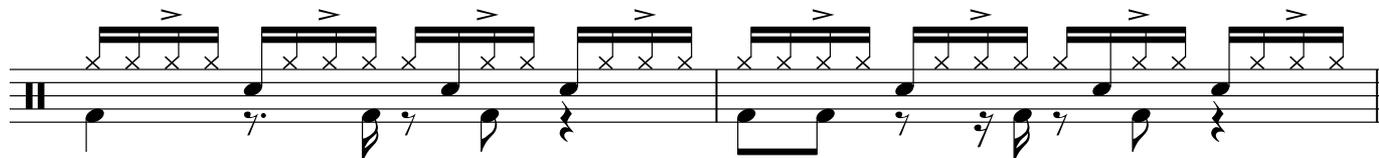
パターン④

ファンク・ビート

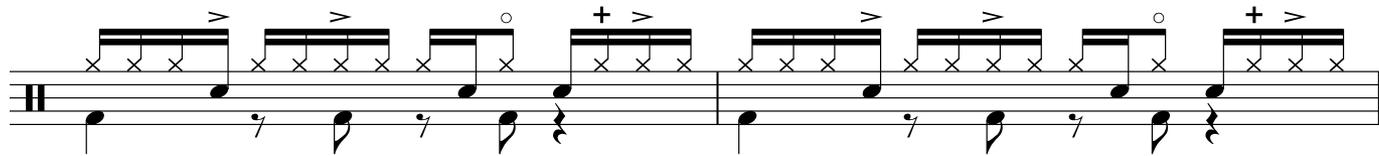
パターン⑤



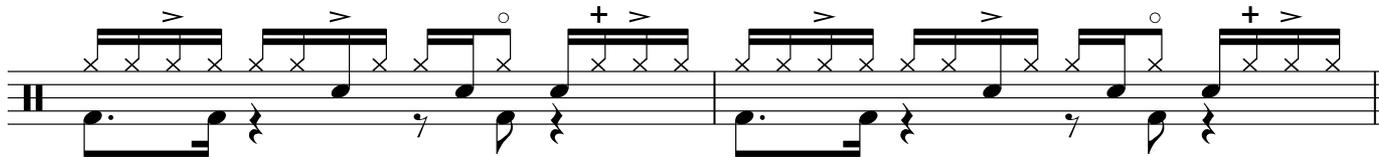
パターン⑥



パターン⑦

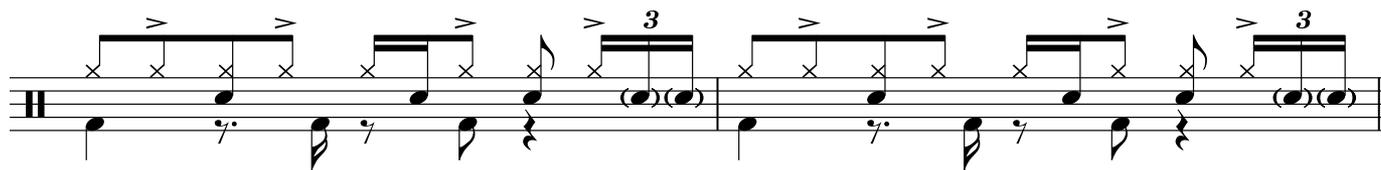


パターン⑧

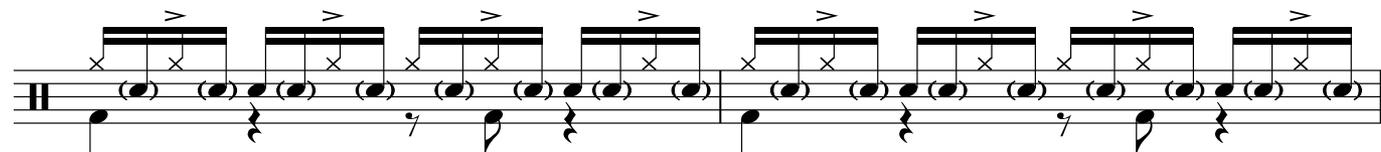


ゴーストノートによる装飾例

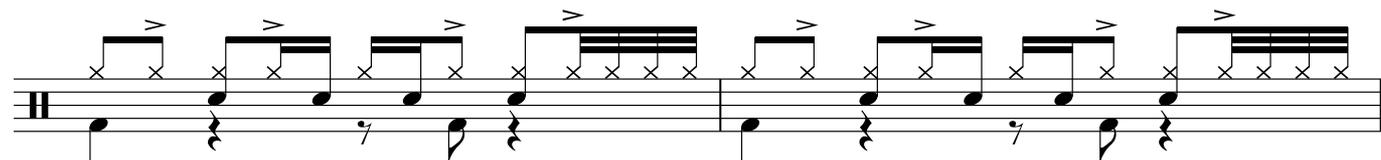
パターン①



パターン②



パターン③



ファンク・ビートの音色選び

ファンク・ビートでは「タイトで歯切れの良い音色」が決め手です。

具体的には、以下の点を意識すると良いでしょう。

- 比較的高めのピッチ(音程)
- 粒立ちの良いアタック(打音)
- 短めのテール(余韻)

ファンク用のキットをお持ちの方はそちらを使うのも良いでしょうし、ポップ・キットのピッチや余韻を調整して加工するのもオッケーです。

ファンク・ビート打込みのコツ

■ ファンク・ビートのベロシティ

裏ノリ感を強調する意味でも、ハイハットのウラ拍にアクセントをつけ、場合によってはアクセント部分を強めの音色を用いても良いでしょう。また、歯切れのよさを重視する意味で、粒立ちの良い音色がえられるベロシティ帯を吟味してあげましょう。

■ ファンク・ビートのクオンタイズ

やや強めのスウィングでレイドバック気味の演奏を表現しましょう。とくにハイハットやキックの16分ウラ、シェイクビートの16分スネアなどはジャストよりもかなり遅めに配置してあげると良い感じのグルーヴになります。加えて、スネアや1拍目以外のキックは、丸ごと20ティックほどレイドバックさせてあげるのも有効なテクニックです。